

民謡歴史散歩

北海道・東北篇

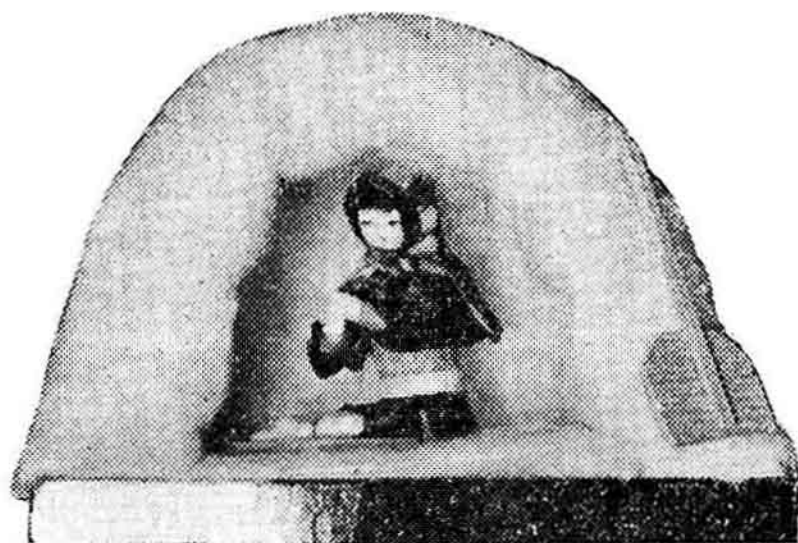
民謡歴史散歩

池田弥三郎
宮尾しげを
編

北海道・東北篇

河出書房新社

民謡歴史散歩 北海道・東北篇



(検印廃止)

昭和36年12月15日 初版印刷
昭和36年12月20日 初版発行

定価二〇〇円

乱丁・落丁本はおとりかえします

編者 池田弥三郎
宮尾しげを

発行者 河出孝雄

印刷者 草刈親雄

発行所

東京都千代田区神田小川町三の八
株式会社 河出書房新社

振替口座(東京)一〇八〇二番
電話(東京元一局)三七二一番

民謡歴史散歩

北海道・東北篇

池田弥三郎・宮尾しげを編

北海道

高橋掬太郎

追分節おいわけぶし

………

(波は磯辺に 寄せては返す)

………

11

ソーラン節ぶし

………

(今宵一夜は どんすの枕)

………

14

ナット節ぶし

………

(工場の窓から 沖見れば)

………

18

青森県

永井 白湄

ナニヤドヤラ	：	(地蔵泣くべア 寺の十文字目で)	21
おしまこ	……	(田名部おしまこの 音頭とる声は)	25
白銀 しろがね ころばし	：	(白銀育ちで 色こそ黒い)	27
馬方道中節 うまかたどうちゆうぶし	……	(ひとり淋しい 馬喰の夜曳き)	28
馬方三下り うまかたさんさが	……	(朝の出がけに 山々見れば)	31
南部 なんぶ あいや節 ぶし	：	(間の山には お杉とお玉)	32
八戸小唄 はちのへこうた	……	(唄に夜明けた かもめの港)	34
ホーハイ節 ぶし	……	(お玉家 どこだ)	36
津軽山唄 つがるやまうた	……	(十五 七が 山を登りに)	40
ナオハイ節 ぶし	……	(寺の和尚さま 日陰の李)	43
十三の砂山 とさ すなやま	……	(十三の砂山 米ならよかる)	45
嘉瀬 かせ の奴踊 やつこおどり	……	(嘉瀬と金木の 間の川コ)	51

弥三郎節 やしやぶろうぶし …… (木造新田の 相野村) …… 52

津軽よされ節 つがる …… (よされ駒下駄の 緒コア切れた) …… 54

津軽じょんがら節 つがる …… (お国自慢の じょんがら節よ) …… 56

津軽小原節 つがるお はらぶし …… (津軽名物 あのと七不思議) …… 57

岩手県

武田忠一郎

ご祝い いわ …… (この家は いぬ亥の柱に幟立てて) …… 61

鑄銭坂 え せんざか …… (鑄銭坂 七坂八坂九坂) …… 62

南部駒牽き唄 こまひ うた …… (めでためでたの 若松様よ) …… 64

南部馬方節 なんぶ うまかたぶし …… (朝の出がけに 山々 見れば) …… 67

外山節 そとやまぶし …… (わたしや外山の 日陰の蔽) …… 70

南部牛追唄 なんぶ うしおいうた …… (田舎なれども 南部の国は) …… 70

南部山唄 なんぶ やまうた …… (十五や十五七は 沢を登るにゃ) …… 74

南部酒屋唄 なんぶ しかや うた …… (酒屋の 始まる時は 篋も杓子も) …… 78

参差踊さんさおどり

……………

(盆の十六日 正月から待ちだ)……………

79

南部なんぶ

よしやれ ……

(よしやれ茶屋の嬢 花染めのたすき) ……

82

沢内さわうちじんく甚句

……………

(沢内三千石 お米の出どこ)……………

84

からめ節がし

……………

(田舎なれども 南部の国は)……………

86

広大寺節こうだいじがし

……………

(新保広大寺坊主 寝たな起きたな)……………

89

秋田県

宮尾しげを

秋田あきた甚句じんく

……………

(甚句踊らば 三十が盛り)……………

91

秋田あきた音頭おんど

……………

(秋田名物八森鱒 男鹿では男鹿ぶりコ)

94

ひでこ節

……………

(十七八コ 今朝の若草)……………

97

秋田あきたおぼこ

……………

(おぼこ 何ぼになる この年暮らせば)

100

姉あねこもさ

……………

(姉こもさ ほこらばほこれ若いうち)……………

104

おめでたい節がし

……………

(おめでてや おめでてや)……………

105

さいさい

……………

(甚句さ中に 誰茄子なげた)……………

106

生保内節	……	(吹けや生保内東風 七日も八日も)……	108
長者の山	……	(盛るさかると 長者の山さかる)……	110
どんぱん節	……	(いつ来イ見イても 池端に)……	113
お山コ節	……	(お山コシャンリンは 何処から流行る)	116
荷方節	……	(今日は吉日 日柄もよいし)……	117
岡本新内	……	(せめて一夜さ仮寝にも 妻と一言)……	119
本莊追分	……	(本莊名物 焼山の蕨 焼けば焼くほど)	122
白挽唄	……	(どでアけらこな 表濡れないで)……	124
おこさ節	……	(啼くな雞 まだ夜が明けぬ)……	125
おしもこ節	……	(本莊後町茶釜屋の おしも)……	127
タント節	……	(人目の関所を破り)……	130
宮城県		白鳥 省吾	
さんさ時雨	……	(さんさ時雨か 萱野の雨か)……	132

塩釜甚句 しおがまじんく	……	(塩釜街道に 白菊植えて)……………	135
斎太郎節 さいたらぶし	……	(松島の 瑞巖寺ほどの 寺もない)……	136
遠島甚句 としまじんく	……	(胡蝶駒鳥 なんの木にとまる)……………	138
おいとこ節 おいとこぶし	……	(おいとこそうだよ 紺の暖簾に)……………	141
定義節 じようぎぶし	……	(こざれ七月六日の晩に 二人揃うて)……	142
長持唄 ながもちうた	……	(今日は日もよし天気もよいし)……………	144
田植踊 たうえおどり	……	(一は万物の始めとかや)……………	144

山形県

高橋掬太郎

最上川舟唄 もがみがわふなうた	……	(酒田さ行くさげ 達者でろちゃ)……………	146
紅花摘唄 べにばなつみうた	……	(世にも賑わし 紅花摘みよ)……………	149
山形大津絵 やまがたおおつえ	……	(花の天童まかりこし やつれし姿の)……	152
山形松坂 やまがたまつさか	……	(松坂越えて 遊女町 茶屋に腰かけ)……	155
あがらっしやれ	……	(一づ飲んでくろや なにやなえたても)	158

新庄節 しんじょうふし

……

(花の万場町のぼればくだる)……

160

山形おぼこ やまがた

……

(酒田山王さんで海老コと鰯コが)……

163

酒田船方節 さかた ふなかたぶし

……

(入船したなら知らせておくれ)……

166

花笠踊 はながさおどり

……

(わしがお国で自慢なものは)……

169

真室川音頭 まむろがわおんど

……

(裏からまわれば垣根コあるし)……

172

豆引唄 まめひきうた

……

(西の雲見りややたらにもめる)……

174

福島県

田辺 尚雄

相馬流れ山 そうま なが やま

……

(相馬流れ山 習いたきやござれ)……

177

相馬二遍返し そうま に へんがえ

……

(相馬相馬と 木萱もなびく)……

181

相馬麦搗節 そうま むぎつきぶし

……

(麦も搗けたし 寝ごろもきたし)……

184

相馬盆踊唄 そうま ぼんおどりうた

……

(今年ア豊年だよ 穂に穂が咲いてヨ)……

186

相馬節 そうま ぶし

……

(相馬中村 石屋根ばかり)……

187

新相馬節 しんそうま ぶし

……

(遙か彼方は 相馬の空か)……

187

かんちよろりん	(俺が相馬の カンチヨロリン節は)……	189
相馬 そうま の宝財踊 ほうさいおどり ……	(梅の若ごよ 今ならずとも)……	189
平 たいら じやんがら念仏	(盆では米の飯 汁では茄子汁)……	193
玄如節 げんじよぶし ……	(げんじよ見たさに 朝水汲めば)……	195
会津磐梯山 あいづ ばんざいさん ……	(会津磐梯山は 宝の山よ)……	198
会津大津絵節 あいづ おおつ えぶし ……	(苦しみも楽しみも うれしきことも)……	201
会津松坂節 あいづ まつさかぶし ……	(目出度うれしや 思うこと叶うた)……	204
こだいず ……	(裏の 裏の山椒の木に 百鳥が)……	204

東北民謡参考地図(略図)

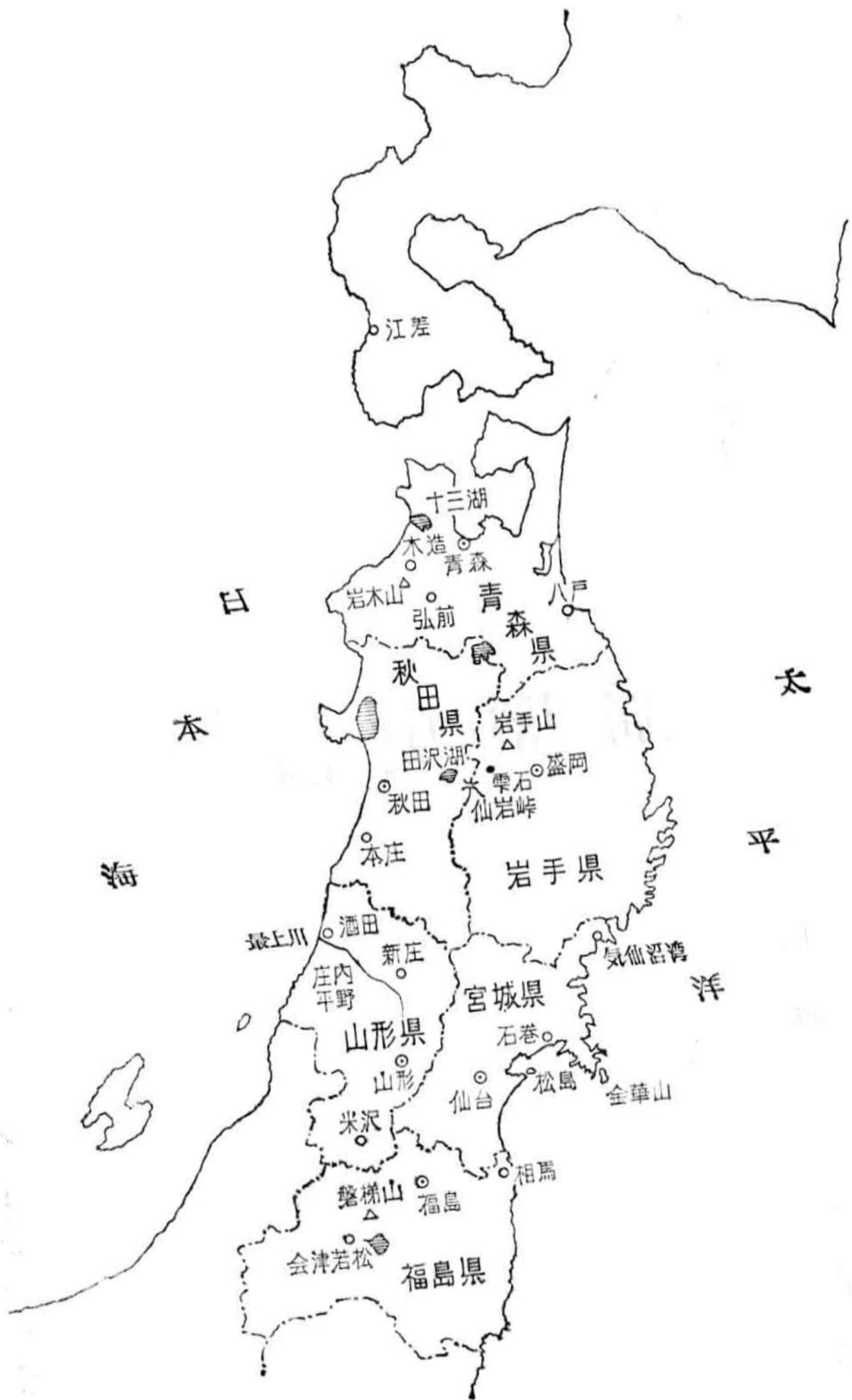
執 筆 者 紹 介 206

《口絵写真》 菅江真澄自画像

池田弥三郎・宮尾しげを編

民謡歴史散歩

北海道・東北篇



北海道

追分節

追分節と言え、誰もが北海道を思う。また、北海道と聞いて、追分節を連想せぬ人もない。と思われるほど、北海道と追分節の關係はふかく、まさに追分節は北海道民謡の代表なのだ、では追分節はきつすいの北海道産かという、そうではない。

追分節の由来や伝説を書いた本のなかには、これを、むかし蝦夷の海岸に居住したアイヌたちが、独木舟に乗って車櫂くるまかいを操りながら、波のうねりに合わせてうたったのに始まると言い、またその踊は、海のアイヌと山のアイヌが交歓の時に、海のメノコたちのうたうのに合わせ、山のメノコたちが熊祭の踊の手で踊ったのが、変化して今にいたったものだとして述べている。

そして、それらの説によったものであるうか、追分踊と言え、みんなアイヌのアツシを着て踊っているが、追分節の謡うたも踊も、ほんとうはアイヌの生活とはなんの關係もないのである。しかも、北海道の追分節は、波のひびきをリズムとした海の民謡であることを特徴とし、それを自慢ともしているのだが、その発生は山に始まっているのであるから、ちよつと意外な

気もしよう。

むかし、いつの頃からかはつきりしないが、伊勢、伊賀のあたりでうたわれた馬子唄が、坂は照る照るの鈴鹿峠から中仙道に入って馬方節と呼ばれ、信州小諸で小諸節となり、浅間山麓の追分宿で、はじめて追分節の称が生まれ、

へ西は追分おいわけ 東は関所せきしよ せめて峠の 茶屋までも

とうたわれた。この浅間山麓の追分節を、いまは信濃追分と呼び、北海道のそれと区別しているが、この追分街道の岐わかれによつて、謡うたも一は江戸へ入り、吉原通いの蕩児などを喜ばせ、さらに新内入りの八丈追分にもなった。また一方は、北陸筋に伝わり、越後追分、佐渡追分などとなり、さらに船人たちによつて、むかしの松前まつまえ、すなわち今の北海道へ渡り、山の民謡變じて海の民謡となつたのである。

北海道の追分節にも、江差追分えさし、松前追分をはじめ、その多少の節まわしの差によつていろいろの別称を持っているが、北海道へ入つてはじめてうたわれたのが江差であるところから、江差追分の名が最も有名でありびつたりと来る。松前という名には、広狭ふたとおりあつて、狭義には松前城のあつた福山の地を指し、「花の松前、紅葉の江差、ひらく函館、菊の紋もん」などの文句もあるが、広義に言えば、むかしアイヌのいた地帯を蝦夷と言い、和人の居住した地域を松前と呼んだ。したがつて、松前追分という名も、広狭ふたとおりに考えられるのである。

追分節

前唄へ波は磯辺に 寄せては返す ヤンサノエー

沖は時化^{しけ}だよ 船頭さん 今宵一夜で 話が

つきぬネ あすの出船を のばしやんせ

本唄へ忍路^{おしよろ}高島 及びもないが せめて歌棄^{うたすつ} 磯谷^{いそや}

まで

後唄へ泣くなと言われりや なおせきあげてネ 泣

かずにいらりよか 浜千鳥

へ鷗の啼く音に ふと眼をさまし あれが蝦夷

地の山かいな

へ大島小島の 間通^{あいと}る船は 江差通いか なつ

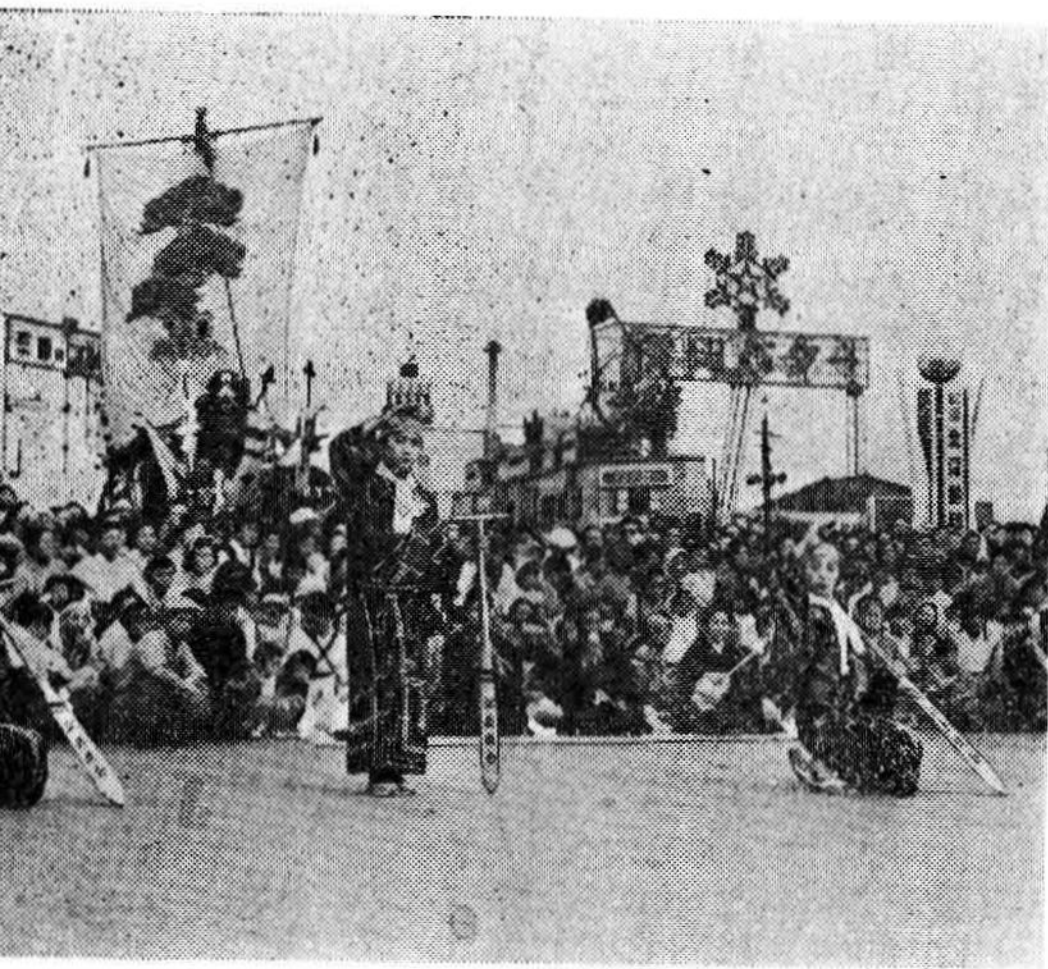
かしや

へ荒い風にも 当てない主を やらりよか 蝦

夷地の荒海へ

← 函館開港百年祭での追分おどり

北海道新聞社提供



ソーラン節
(沖揚げ音頭)

ソーラン節は、一に沖揚げ音頭という。一に、などとというと、別称的に聞こえるが、じつは沖揚げ音頭の方が本名で、レコードなどに盛んにうたわれるようになってから、わかりよいソーラン節の名の方が、全国的に通用性を持つようになったのだという方が、当っているかもしれない。ソーラン節の称は、その前囃子のソーランソーランから出たものであり、沖揚げ音頭というのは、鯨の沖揚げの時にうたう民謡だからである。

だから、ソーラン節に真実感をこめてうたうには、鯨の沖揚げの有様を知ってかからねばならない。私は北海道の海村生まれで、幼ない時から沖揚げの実況を見て来たので、どんなにでもくわしく、その説明ができる。

鯨の漁獲には、建網たてあみ、刺網さしあみ、曳網ひきあみなどを多く用いるが、なかでも代表的なのは建網で、沖揚げ音頭をうたうのも、この網の場合に限る。それは、海岸からあまり遠くない沖合いに設ける箱状の網で、産卵すべく海岸近くへ来る鯨が、しぜんに入るようにできている。

建網には、ボチ舟という小舟と、起こし船という大型の船が、両端に分れて付く。ボチ舟には一番船頭が乗っていて、徹夜で鯨の入るのを見張る。起こし船は夕方から出て行き、屋形を組んだ中で漁夫たちが寝ているが、ボチ舟から鯨が乗った(入ったこと)という合図があれば、